厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）

入院中の強度行動障害者支援・介入の専門プログラムの整備と地域移行に資する研究

分担研究報告書

看護師による介入・研修手法と看護師の組織作りについて

分担研究者	根本　昌彦	（国立のぞみの園）
研究協力者	中村　明美	（社会福祉法人はるにれの里）
	野田　孝子	（砂川市立病院付属看護専門学校）
	五味美知子	（国立のぞみの園）
	黛　智則	（国立のぞみの園）
	堀越　徳浩	（国立秩父学園）
	青山　瑞穂	（国立病院機構肥前医療センター）
	江頭　弘典	（国立病院機構肥前医療センター）

研究要旨：

強度行動障害支援を行う医療機関や福祉施設には看護師が配置されている。その看護師を養成する課程では強度行動障害の対応方法を学ぶ機会は少ない。更に、医療機関などの実務経験も得にくい状況である。

学びや経験が得にくい状況に対応すべく、強度行動障害医療研究会（現学会）の看護師分科会（略称 KYOKAN）では、令和４年度から自閉症の基礎に関する研修を３回実施している。その研修内容や結果のアンケートから、強行に関わる看護師の質の向上には、“、“研修の機会の増加”、“看護師向け書籍（文献）の刊行” 看護サービスを評価する仕組み”が必要であることが解った。加えて看護の情報交換や共有の場として“看護師が連携する場づくり”も重要である。

A. 概要と目的

強度行動障害のある方（以下、強行）は、福祉施設や医療機関で様々な支援を受けている。その現場には一部事業を除き看護師が配置されている。看護師は、医療機関において医師の指示のもと、治療効果が最適となるように病棟（生活）環境調整を行っている。

この環境調整の内容は多岐に渡る。食事、排せつ、睡眠、保清、室温、明るさ、などの身体や生活環境、服薬や検査等の治療に関する項目もある。加えて、寄り添い見守りや不快な刺激の除去などの精神的な環境も含まれる。

当然、強行の環境を整えるには知的発達障害や自閉症等に対応するスキル、地域移行した場合に受けられる福祉サービス等の福知求められる。

看護師には先述したような知識や技術はどの程度あるのかについて、看護師養成のカリキュラムでは、知的発達障害に触れた内容量は全体の１％以下であり、教員も（知

的発達障害者の看護）経験者が居ない（2019 市川ら）といった状況がある。教育や現場で学び経験することのない看護師は実際の現場でどのような状況にあるのか、このことに関する調査も見当たらなかった。

そこで、本研究では、強度行動障害医療研究会（現強度行動障害医療学会）の看護分科会（以下、KYOKAN※）で行った研修の内容や結果アンケートを基に看護師の現状を報告する。

※　KYOKAN は、令和 3 年 7 月に強度行動障害医療研究会（現学会）の看護師分科会としてスタート。メーリングリストには看護師約 30 名のほかオブザーバーとして医師、歯科医師、国立事業所幹部等が参加している（令和５年４月現在）。医師の分科会は KYODO。

B. 方法

KYOKAN で行った研修 3 回の内容や参加者アンケートの結果から、強行に関わる看護師の状況やニーズを明らかにする。

アンケートは、講義終了後に Google form を利用し実施。

C. 研究結果

研修 3 回を実施した結果については以下のとおりである。（研修はすべてオンラインライブ）

研修は、オンラインに不慣れな参加者を想定しオリエンテーションを実施（写真１）。

講義によっては、参加している感覚を持てるようにリアクションボタンを積極的に活用した（写真２）。

アンケートは step１，３は研修直後に、step２は研修７日後に実施。

（１）Step1「自閉症スペクトラム症の理解」

①　日時：令和４年７月 27 日（水曜日）
　　13：00 から 16：30

②　参加人数：25 名

③　主なプログラム

「自閉スペクトラム症の理解」
　肥前医療センター　医師會田千重先生

「（自閉スペクトラム症）疑似体験」
　はるにれの里　看護師　中村明美氏

④　　研修意見（抜粋）

・*ASD の基礎がとても分かりやすかったです。*
・*障害者への看護初心者の私には疑似体験がとても分かりやすかったです。*
・*自分の感じている部分が参加されている方も感じている事がわかって、勇気を頂きました。*
・*看護の活動が広がる予感がしています。*
・*初めて聞く内容もあり、とても勉強になりました。*
・*勉強会が少ないので、学びの機会を与えていただきありがとうございます。*
・*生活介護が中心の中で、看護師としての役割、関りを考える良い機会となりました。*

（２）Step2「具体的な支援方法の考え方」

①　日時:令和 4 年 12 月 16 日（金曜日）
　　13：00 から 16：30

②　参加人数：41 名

③　主なプログラム

「障がい特性に応じたサポートの考え方」
　はるにれの里　中村明美氏

「実践報告」
児童期　秩父学園　堀越徳浩氏
成人期　のぞみの園　五味美知子氏
医療現場　肥前医療センター江頭弘典氏

⑤　研修意見（抜粋）

・*研修をきっかけに強度行動障害についても自身でも勉強をするきっかけにもなった、業務にも生かせる内容だった。*

・*予防接種や採血時に同じ苦戦をしていたので、実践に活かしたいと思った。*

・*大きめの医療機関・施設でも試行錯誤しながら頑張っておられることを知った。*

・*今まで看護師として強度行動障害について学ぶ機会は少なかったので、また勉強させていただく機会があると嬉しい。*

（３）Step3「医療と福祉の連携・保護者の想い」

①　日時：令和５年４月 21 日（金曜日）

②　参加人数：29 名

③　主なプログラム

医療と福祉の連携

「医療の立場から」

肥前医療センター 看護師長 野間口誠氏

「福祉の立場から」

はるにれの里 生活支援員 武田里奈氏

「権利擁護と虐待防止」

はるにれの里 看護師 中村明美氏

「保護者の想い」

手をつなぐ親の会 小島幸子氏

⑥　研修意見（抜粋）

・*行動の特性をもっと理解して、医療的な対応ができればと思っております。*

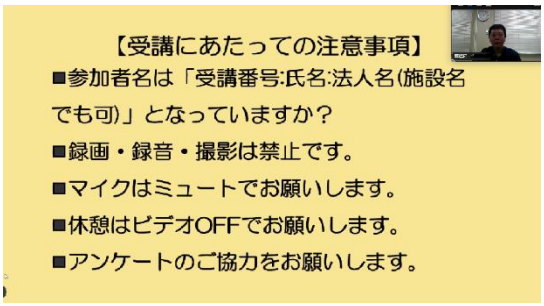
・*現場の看護師は、同じような悩みを抱えておられることを知ることができた。*

・*現場の生々しい苦悩や意見など聞けて参考になりました。*

・*悩みごとの共感が得られることは本当にうれしく、ありがたい機会をもらえたと感謝しています。悩みはそれぞれたくさんあると思います。もっともっと語り合える機会があればと願います。*

・*自閉症スペクトラム症など病気の特性に関する知識の欠如が虐待に大きく関わっているとの内容がすごく勉強になりました。*

・*強度行動障害の方の看護について情報がないのでとても勉強になりました。*



「オリエンテーション画面」（写真１）

「受講者の様子」（写真２）

（いいね機能の活用）

「講義の様子（講師）」（写真３）

D. 考察

（１）看護の役割

強行を含む知的発達障害者の健康に関する課題は多岐に渡る。早期高齢化傾向があり、30 代で白内障、40 代で歩行力低下や心筋梗塞、50 代で誤嚥性肺炎にり患し易い（2013 相馬ら）。服薬関連では、一日に服用する薬包数が平均 6.6 包/日、錠剤と散剤では、6.7 錠・散剤/日（2020 国立のぞみの園）と多剤服用状況がある。医療機関への受診に関しては、物理的、経済的等の障壁がある（2013　Jennifer Pharr Ph.D., Michelle Chino Ph.D.）。他にも、健康診断未受診や生活習慣病のリスクがある、感染症予防が困難（マスクができない、三密になりやすい）等の課題がある。これらの課題は表面化しているものもあれば、見えないものもあり地域移行の潜在的な阻害要因となっている可能性がある。

この様な状況は、入院中も地域移行した後も日常的に存在しており対応が必要である。日常的な対応に関しては、医療機関では看護等の病棟スタッフが担っている。福祉事業所では生活支援員と看護師が連携しながら行っている。何れにしても看護師の関与が重要なポイントとなる。

その看護師の役割について、保健師助産師看護師法の総則で、看護師とは「傷病者若しくはじょく婦に対する療養上の世話又は診療の補助」（抜粋）とされている。加えて、日本看護協会が示す看護職の倫理綱領の前文において、健康の増進、苦痛の緩和を行い、健康の回復、疾病の予防（中略）を支援するものと謳っている。以上のことを踏まえれば、強行の方々への看護師の役割は大きいものである。

しかし、医療機関や福祉事業所に所属する看護師には特有の課題が存在する可能性がある。そのことについて KYOKAN 研修の結果アンケートからの気づきを以下に述べていく。

（２）根拠に基づく看護が困難

学びの場の少なさについて以下のような意見が複数見られた。

・*強度行動障害に関する対応できる機関や専門家が少なすぎます。*（step１）

・*今まで看護師として強度行動障害について学ぶ機会は少なかったので、また勉強させていただく機会があると嬉しい。*（step２）

・*強度行動障害の方の看護について情報がないのでとても勉強になりました。*（step３）

研修や看護向け文献が不足している可能性が示唆された。看護師を含む医療系の専門職は EBM（Evidence-Based Medicine の略、日本語では根拠に基づく医療）が基本であることからも、強行に関する看護の研修や文献の少なさは大きな課題と考える。

（３）交流（情報共有）が困難

交流の機会の少なさについて以下のような意見が複数見られた。

・*自分の感じている部分が参加されている方も感じている事がわかって、勇気を頂きました。*（step１）

・*現場の看護師は、同じような悩みを抱えておられることを知ることができた。*（step３）

・*悩みごとの共感が得られることは本当にうれしく、ありがたい機会をもらえた。*（step３）

EBM に併せて現場に携わる者どうしの

情報交換は医療サービスの提供には欠かせないものであるが、このことは、強行を含む知的発達障害に関わる看護師にとっても同様である。交流の場の少なさの原因は、強行等に関わる医療機関が同一地域に少ないことによる距離の問題、（２）で述べた研修の少なさのような場の不足、福祉事業所では看護師は少数で日常のルーティンワークを担当していることから、現場から離れて研修を受けることが難しいといった、配置や雇用形態による問題もあると思われる。

E. まとめ

強行に関わる看護師の質の向上は、当事者の健康の維持や増進に直結する重要事項と考える。

そのために、強行に関する、“看護師の研修の機会の増加”、“看護師向け書籍（文献）の刊行”、“看護サービスを評価する仕組み”が必要である。加えて連携を深めるために、“看護師が連携する場づくり”が重要であった。

＜文献＞

① 相馬ら、「高齢知的障害者の死亡原因と疾患状況」、厚生の指標 60（12）、26 - 31、2013

② 市川ら「知的・発達障害における福祉と医療の連携」金剛出版、31-32、2019

③ Jennifer Pharr Ph.D., Michelle Chino Ph.D. a「Predicting barriers to primary care for patients with disabilities: A mixed methods study of practice administrators」Disability and Health Journal Volume 6, Issue 2, 4、116-123、2013